

「あの日、あの時の記憶」

たかぎ すすむ
高木 晋

● J P 労組・中央執行委員

東日本大震災から間もなく5年が経過しようとしています。震災当日のことは今でも鮮明に記憶に残っています。当日、私は仙台で勤務しておりました。長時間に渡る強いゆれで、建物は崩れ、停電、断水など、ライフラインは一瞬にして奪われました。当日は被害状況を把握するすべがなく、携帯電話も時間の経過とともに使用できなくなりました。

震災直後、妻から連絡がありました。「今から逃げるから」その言葉を聞いて安心したものの、家族の安否が確認できたのは、それから相当な時間が経過してからでありました。

当時、仕事の都合で、妻と娘は、岩手県の沿岸部「宮古市」に住んでいました。勤務場所や住んでいたアパートも海岸に近い場所にあり、私は、津波の襲来を映像で見た時、「生きてくれ」と願うばかりでした。幸いにして妻と娘は無事でした。津波は川を昇り、アパートの反対側の川岸から襲来したことから難を逃れました。衛星電話からの無事の知らせは、私が待ちに待ったものでした。

震災直後、妻と娘は別々に逃げていました。保育園児だった娘は、先生に誘導され、町中のサイレンが鳴り響く中、山を駆け登り、高台にある納屋に他の園児と一緒に避難していました。先生や父母の協力のもと、どこに娘が避難しているか確認し、二人が再会できたのは当日の深夜でした。娘は再会した時に寒さと震災の恐怖に震え泣いていたようです。

その翌月、妻の転勤に伴い二人は盛岡市の自宅に戻ってきました。妻は被災地から離れることに罪悪感を抱き、自宅に戻ってからも毎週の

ように宮古を訪れ、当時お世話になった知り合いに支援物資を届けていました。

震災からの余震は、5年を経過した今でもあります。余震が来る度に当時の記憶がよみがえってきます。特に、娘は「津波が来る」といって震え、涙を流しています。「あの日、あの時の記憶」がよみがえるのでしょうか。内陸部に位置している盛岡には「津波は来ないよ」といっても、当時の記憶がよみがえているのです。娘にとって、一生忘れることが出来ない記憶が残ってしまいました。

東日本大震災から間もなく5年が経過します。また、阪神淡路大震災から21年が経過しました。震災を経験した者は決して忘れることが出来ない、忘れてはいけないことだと思っています。また、時間が経つにつれ「心のケア」を必要とする方も多く存在すると思います。

先般、福島県の沿岸部を視察しました。福島には福島第一原発事故の影響のため復旧すら進んでいないエリアがあります。5年が経過した今でも、未だに時が止まったままのエリアがあることを忘れてはなりません。津波による被災地は、土地のかさ上げ工事を行いながら、街の復興計画に基づいた作業が行われていますが、歩みはまだまだ遅いと感じます。そのため「復興の速度より、風化の速度が速い」ようにも思われます。震災は、決して「風化させてはならない」、そして、これからも被災者にとっては「心のケア」が重要になっています。東北出身者として、全国から被災地に物心ともにご支援頂いた「絆」に感謝しつつ、被災地と向き合っていきたいと考えています。